

## 食文化に接し、新たな未来へ開眼

明治大学 農学部 2年

日下 舞

8月2～31日、ベトナムのホーチミン市国家大学人文社会科学大学で短期研修に臨みました。今回のプログラムではベトナムの歴史、農業問題、教育、外交などについて英語で講義を受けたほか、授業以外でも、英語圏の出身でない友人と知っている英単語を駆使して会話を繰り返し、とてもよい語学の鍛錬になりました。

私がベトナムを研修先に選んだ理由の1つに、ベトナムの食文化に興味があったことが挙げられます。将来、食品会社で開発や研究をしたいと考えていますが、渡航前はベトナムで学んだことと将来の夢がどうつながるのか、具体的にはイメージできませんでした。ところが、実際にベトナムに行ってみると、現地には多くの日系企業が進出しており、スーパーやコンビニでは日本の食べ物がたくさん売られているのを目にしました。日本でよく知られているお菓子や飲み物が、現地の人のお好みに合わせて味を少し変えられ、同じパッケージのまま売られていました。また、「OISHI」という名の菓子メーカーもあり、日本の影響を大に受けていることが分かりました。こうした状況を知るにつれ、「日本にあって海外にないものを広げるための開発」という仕事にも興味を持つようになりました。このような考えに至ったのは、実際に外国へ出向き、1カ月間現地の人と同じものを食べる経験をしたからこそでしょう。日本食とは違う、異食文化に触れ、将来の夢についてのヒントを得られたのも非常に良い経験になりました。

親日家の多いベトナムでは、日本について話す機会が多々ありましたが、質問に答えられないこともしばしばでした。日本について知らないことがたくさんあるということは、この海外研修に参加して初めて気が付いたことです。これまでは、「海外についてもっと知りたい」と思ってきましたが、その前に、「日本についてもっと知らなければならぬ」と痛感しました。こうした意味でも、自分の意識が変わった貴重な経験ができた海外研修でした。



交流会でプレゼンテーションをした仲間たちと（前列左から3番目が日下さん）